

谷内 今日は非常に遠いところを、週末にもかかわらず私たちのプロジェクトの発表会に来ていただきまして、本当にありがとうございます。私は、地球研の「琵琶湖-淀川水系における流域管理モデルの構築」というプロジェクトのリーダーをやっております谷内と申します。よろしく願いいたします。最初に私のほうから趣旨説明をさせていただいて、その後今日セッションに入りたいと思います。

今日の私のほうからの報告内容ですが、まず最初に、私たちのプロジェクトが所属しております総合地球環境学研究所、長いので私たちは地球研と呼んでおりますが、そのご紹介をさせていただきます。その次にワークショップの目的についてお話をし、最後にプログラムのご紹介、こういう順番で進めさせていただきます。

地球研ですが、今から5年ちょっと前、2001年4月に京都にできた、もともと文部科学省の大学共同利用機関です。その最後の大学共同利用機関です。設立目的は、地球環境問題の解決に向けた新しい学問を創出する、そういうことを目的としております。その際に、地球研のほうで持っている認識というのは、ここにあります三つです。一つは、地球環境問題の方向を担うのは広い意味での人間文化である。この文化というのは社会経済システム、あるいは制度、そういうものをすべて含んだものだというふうにお考えください。そういう人間が自然とさまざまな形で関わり合いを持つことによって、その相互作用が現在に至るまでに地球環境問題になってしまったのではないかと、いわばそういうストーリーを大きな枠組みとして持っております。こういうバックグラウンドのもとで、ここでは未来可能性と書いてありますが、いわゆる持続可能性です。そういうものが問題を解明した後でどういうふうを考えればよいかということを追及しております。

では、どういうふうに私たちの研究所は研究を進めているかといいますと、ここにあります研究プロジェクト方式をとっております。これはどういうものかといいますと、世界のある地域を決めて、そこで具体的な環境問題を5年間、いろんな研究分野の研究者と一緒に研究します。その環境問題に対する結果を得ると同時に、その結果をプロジェクトを超えて地球研全体の地球環境学の構築に向けて共同していく、そういう枠組みです。2004年に国立大学の独立法人化に並行して、大学共同利用機関も法人化されました。さらに、地球研は人間文化研究機構という五つの研究所並びにそれに関係する大学共同利用機関が一緒になったものの一つとなって現在に至っております。それから、今年の3月に京都市北区、ここに新しい建物ができて移転して、現在に至っております。人間文化研究機構というのは英語では National Institutes for the Humanities と言いますが、五つあります。その一つが私たちの地球研です。

これは皆さんがおられる地球を外から見たものですが、上から見ると半円形です。中を見るとこういう感じで、さっきの外側から見た半円形の部分が150メートルぐらい続いています。そこには敷居とかは基本的になくて、15のプロジェクトがそれぞれ場所を与えられて、そこで自分の好きなように家具とかそういうものを設置してプロジェクトを進めるという形になっています。だから基本的に個室というものはなくて、プロジェクトの中でもコミュニケーションを自由に促進する形になっており、さらにプロジェクトの間にも壁というものが基本的にあります。これはプロジェクトを超えて地球環境学を推進する、そういう目的からこういう不思議な建物が設計されたというふうに聞いております。ちなみに、私たちのプロジェクトは奥の方です。後で、セッション2が終わったときに、簡単ですが、地球研のツアーをさせていただきます

す。そのときに見てください。

さて、地球研ですが、プロジェクトによって特に重点を置いている視点があります。五つの研究軸と呼んでおりますが、英語の場合は三つのパースペクティブというふうになっています。自然と人間のどちらに重みを置くかで1番、2番があり、時間と空間、その視点から環境問題を展開していくというのが3番、4番です。それに加えて概念から検討するという、そういう五つの枠組みがあります。ただ、どのプロジェクトも多かれ少なかれこの五つの視点は持っていて、その重みづけが違うというふうにお考えください。

さて、私たちのプロジェクトは特に空間スケールに着目したプロジェクトとなっております。2002年に始まりまして、今年がプロジェクトの最終年度、5年目になっております。このプロジェクトが始まったときのリーダーは和田英太郎先生で、今、地球環境フロンティア研究センターのほうに移られましたが、私は2004年途中からプロジェクトリーダーを引き継いでおります。コアメンバーにこういった方々、いろんな分野の方々がおりますが、今日はコアメンバーの方を中心に司会及び発表をお願いしております。

本日のワークショップの目的としては二つあります。一つは、この5年間の私たちの琵琶湖-淀川プロジェクトの成果をご紹介して、皆さんにご意見、あるいはこのようにしてはどうかという議論をいただきたいと思っております。もう一つは、このプロジェクトをやってきた中で、このプロジェクトではカバーできなかった課題、あるいはこのプロジェクトをやっていく途中で新たに見つかった大事な課題があると思うのですが、それについて議論をするとともにプロジェクトの総括をしたいと考えております。

ここから具体的なプロジェクトの簡単な概要だけを私はお話します。このプロジェクトは流域管理の実践的要求に基づいておりま

す。特徴としては、後でお話に出てきますが、流域の持つ階層性というものに着目しております。そこから理工学と社会科学の研究者の連携、私たちは文理連携と呼んでおりますが、それによる調査活動と野外での実践をもとに、流域管理に必要な環境診断と合意形成の方法論を開発・検証していこうと、そういう目標を持ってきました。それが目指すところというのは、地域住民あるいは行政が主体となって流域管理を行う上で必要な環境情報、また持続可能性のある社会的なシナリオを提示できる、そういう学問を創出したいというところにあります。

それから、私たちが研究対象として選んだ地域は日本の関西にある琵琶湖-淀川水系です。これは日本で人間活動によって最も大きな影響を受けた流域の一つであり、また、人と自然の関係においても古来から密接で古い関係を持っている、そういう流域であります。ところが、この流域も昭和30年代以降、社会的に大きな変化があつて、生態系や水質、あるいは人と水の関係、社会そのものに大きな変化がもたらされてきました。その一つの流域スケールの大きな水環境問題として富栄養化問題がありますが、私たちは富栄養化問題に関係する、後でお話しますが、農業濁水問題に着目してきました。

簡単に琵琶湖-淀川水系のご説明です。これが全体なんです、この黒い線の上側が上流の琵琶湖流域で、ほぼ滋賀県と一致します。下流のほうは京都・大阪という大都市圏を含む流域です。その先の方は大阪湾へとつながっております。私たちは、まず琵琶湖流域で特に研究を進めておまして、そこで彦根市の西のほうにあります稲枝地域というところをフィールドとさせていただいて、大きく三つのスケールで研究を展開してきました。その成果に基づいて淀川下流域のほうも研究を進めております。

基本的に人口密度のあり方を見ていただく

とわかると思うのですが、上流の琵琶湖流域では湖周に沿って農村地帯が発達しているのに対し、下流のほうでは大都市圏を含む、かなり違った流域となっております。そういうものの総体として琵琶湖-淀川水系があるわけです。

このワークショップ、実は2003年12月、今から約3年前にも国際ワークショップを開きまして、これはプロジェクトが始まって1年半ぐらいたったときです。どこでプロジェクトをやって、どういうふうに進めていこうかというアイデアをつくったときに、流域管理の専門家の方々に国内外から来ていただいて議論をしていただいて、私たちの考え方に対するコメントをいただきました。それと同時に流域管理の基本的な考え方をアップデートする、そういう場でもありました。今回は、それから3年たって私たちのプロジェクトが終わろうとしているのですが、どういう進展があったか、それをできるだけ当時のことを知っている方に来ていただこうと思ひまして、今回も前回の参加者の方をできるだけご招待しております。

これがプログラムでして、日本語で書かれています。冊子のほうに英語の分がありますので、そちらをご参考ください。まず、今日は琵琶湖流域の農業濁水問題を事例として、この話に集中してセッションを組み立てております。

セッション1では、まず、琵琶湖における農業濁水問題をどういうふう理解すればよいのか、私たちの言葉で言えば流域診断という言葉ですが、その手法及びその手法からわかった結果についてお話しします。その前にコンセプトのお話もあります。

次にセッション2では、そしたら、そのようにわかった流域診断の結果をどういうふう流域管理に生かせばいいのか、そういう話になります。

明日の日曜日は、琵琶湖流域から少し離れ

まして、琵琶湖流域で展開した方法あるいは考え方をもとに淀川下流域、あるいは多様な流域に関して、特に階層性という視点からのアプローチがどういうふう貢献できるのか、また私たちのプロジェクトの成果が地球環境学というものにどういう知見を与えることができたかについて、皆さんとともに意見を交換していきたいと思ひます。

セッションのほうは、こういう司会、発表、コメンテーターの方々となっております。特に前回お呼びした流域管理に関係する方々と、今回は滋賀県の関係者の方々にもお忙しい中を無理を言って来ていただきました。こういう構成でお話ししていきたいと思ひます。

これで私のお話はほぼ終わりなんです。あとはセッション1に入っていきたいと思ひます。陀安さん、お願いいたします。